幼児期の遊びを通した学びをつなげ「出来る」よりも「やりたい」思いを増やす

子どもたちは保育所や幼稚園でどのような体験や学びをして、小学校に入学してくるのか。
そして、小学校は子どもたちの成長をどう受け止め、
どのような観点で指導すれば、小学校の学びへと移行できるのか。上越教育大の角谷詩織准教授と、
幼小接続の活動を進める同附属小学校の神村大輔副校長、同附属幼稚園の長谷川敬子副園長に話をうかがった。

保幼小接続のポイント
自由度の高い教育活動が幼少期の子どもを伸ばす

――最初に、保幼小接続の取り組みを深めることがなぜ大切なのか、また、現在の取り組みが抱える課題などを、それぞれのお立場から聞かせていただけますか。

長谷川　まず言えるのは、保幼小の接続が円滑でないと、小学校での教育的な効果が十分に望めないということです。幼児期には伸び伸びとした環境で自己肯定感を育むことを目指しますが、小学校に入学して慣れない環境やルールによって萎縮してしまうと、子どもはそれまで自信を持って出来ていたことでも出来なくなってしまいます。これはとても残念なことです。幼児期に育てた学びの芽を小学校が引き継いで伸ばしていくという考え方が、とても大切だと考えます。

神村　園児たちの姿を見ると、「こんなに伸び伸びと活動しているのか」と驚かされることがよくあります。園では最年長でリーダーとして動いていたのに、小学校では最年少となり、上級生に手伝ってもらって、給食を食べる、手洗いに行くというのでは、子どもは大きなギャップを感じるでしょう。そうならないよう、幼児期の「学び」を小学校でいかにつなげていくかは、重要な課題です。

　児童と接していて感じるのは、幼少期の子どもの力を、教科の区切りを始めとした大

上越教育大大学院学校教育研究科
角谷詩織 准教授

すみや・しおり◎お茶の水女子大大学院人間文化研究科博士課程修了。お茶の水女子大大学院人間文化研究科助手を経て、現職。専門は発達心理学、教育心理学。

学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

上越教育大附属小学校
神村大輔 副校長
かむら・だいすけ◎新潟県公立小学校教諭、長岡市立前川小学校校長、新潟県教育庁下越教育事務所 指導主事などを経て、現職。
上越教育大附属小学校◎2012年度は「自分らしい生き方をつくる子ども」をテーマに校内研究に取り組む。児童数は459人。

人の考えた枠組みの中だけで伸ばしていくのは、難しいのではないかということです。1992年度に生活科が設置されたのも、そのような考え方が背景にあるからだと考えます。教科学習のあり方を捉え直し、可能な範囲で教科の枠を越えて自由度の高い教育活動を展開することが、子どもの学びの芽を伸ばすために必要ではないでしょうか。本校の教育は、そのような考えが原点となっています。

角谷　現在の保幼小接続を巡る課題は、2つの方向から考えられます。1つは、いわゆる小1プロブレムです。これは、例えば、授業中にじっと座っていられない、定位置の座席を嫌がるなど、園と小学校の環境やルールの違いから生じるものです。チャイムをなくしたり、座席を自由にしたりと、段差を滑らかにする工夫がされていますが、いまだ決定的な解決策は提示されていないのが現状です。

ただ注意すべきなのは、小1プロブレムにかかわる段差が全て解決すれば、子どもの発達や学校への適応、学習意欲などが十分に促進されるかどうかは分かっていないことです。接続の問題を幼小の段差だけに求めると、見落としてしまうことがあるかもしれません。そこで、もう1つの課題として、小学校で幼児期に培われた力を伸ばせているかという観点で、保幼小接続を考える必要があると思います。これには、小学校の先生がいずれかの園に足を運んで幼児期の子どもを理解することが必要ですが、幼小双方が多忙ということもあり、深い交流を実現しているケースはそれほど多くありません。

幼児教育の観点
「遊び込む」体験から自己調整をする力が育つ

――2校が幼小接続を進められている上で大切にされていること、また幼児期と小学校での育ちの違いなどをお話しください。

長谷川　小学校で伸びる子どもを育てるために、本園では「遊び込む」ことを最も大切にしています。遊びから、言葉や数量、科学など小学校での学びにつながる芽が生まれるからです。例えば、ドングリが山のようにあっても、子どもは「数」を意識しません。しかし、ドングリに穴を開けてネックレスを作る遊びにすると、ひもを通すたびに「1個、2個、3個……」と自然に数え始めます。積み木を片付けるにしても、その過程には数量や形の概念が必要です。また、文字を教える時期はよく考える必要がありますが、紙粘土でクッキーを作っていた時に『クッキー屋さんの看

上越教育大附属幼稚園
長谷川敬子 副園長
はせがわ・けいこ◎上越市立大手町小学校教諭、上越市教育委員会 学校教育課 管理指導主事、上越市立里公小学校校長などを経て、現職。
上越教育大附属幼稚園◎2010年度から3年計画で「幼小の円滑な接続を促す幼児教育の推進」をテーマに文部科学省の研究開発学校指定を受け、研究を推進する。園児数は62人。

板を書きたいから字を教えてほしい』と子どもから求められたことがありました。このように、遊ぶ過程で自ら学んだことは、子どもの心に刻み込まれていくのです。

――幼児期に集中して遊ぶ経験が家庭学習につながるという結果もあります（図1）。

角谷　附属幼稚園と小学校の調査結果でも、幼児期にたっぷり遊んで学んだ子どもは、1年生の1学期時点での主体性や伝え合う力、社会性、協同性、集中力の発揮に結び付いていることが分かっています。遊ぶために友だちと話したり協力したりする中で、自己調整力などが次第に育つからでしょう。また、遊びに興味を持って没頭している時、子どもは周囲の雑音があまり気になりません。これは、小学校に入ってから、課題に集中して取り組む力につながります。

神村　幼児期の学びは無自覚的であり、小学生では自覚的になるといいますが、長谷川先生のお話のように、遊びの中で自然に学んでいた子どもが、1年生になってすぐ自覚的な学びに切り替わるのは無理があると思います。

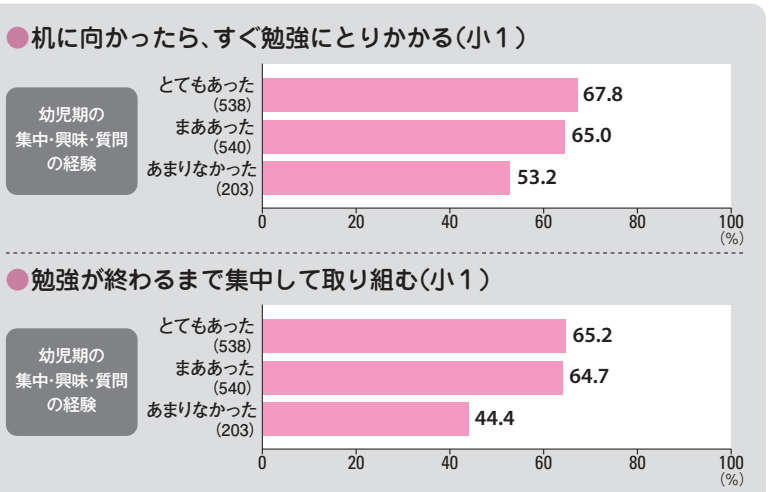
長谷川　本園では、「小学校からの学びの基盤となる力」と「実社会で活きてはたらく力（リテラシー）」を整理し、先生が小学校への見通しを持って活動できるようにしています（図2）。小学校の先生が幼児期に学びの芽が育まれていることを理解されていれば、感覚的な学びと自覚的な学びを行ったり来たりしながら、自覚的な学びに徐々に慣れさせることが出来るのではないでしょうか。

角谷　お二人の話から、改めて意識する必要があるのは、身体的・感覚的と言われる幼児期の学びと言語的・自覚的な小学校の学びの違いかと思います。幼児教育では、「自分で発見した・気付いた」といった、良い意味での錯覚を子どもが起こすように環境を整えることが大切にされています。一方、小学校でも、そのような感覚を持たせる環境設定として、教師の発問や学級文庫の内容など認知的・言語的レベルの刺激が重要となります。

また、小学校以降の教育の土台として必要な力は、①語いを増やすこと、②数と量の対応に気付くこと、③自己調整をする力を育むことだと言われています。

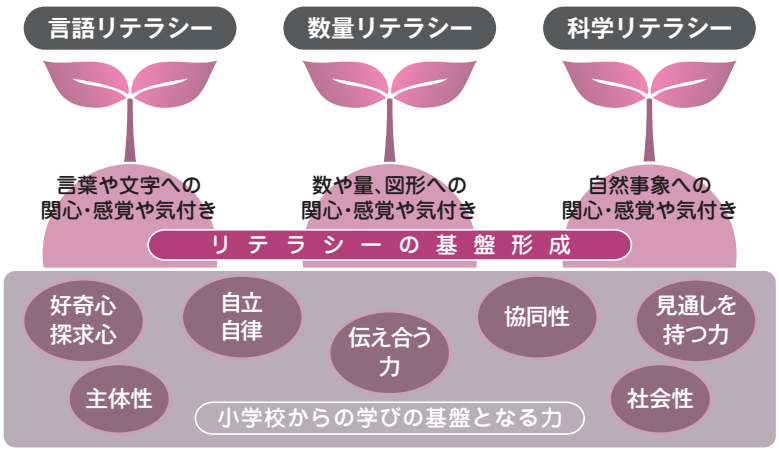
特に、自己調整をする力は、外からの多く

図1　小学1年生での家庭学習の様子と、幼児期の様子との関係



＊「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の％　＊（　）内はサンプル数
＊幼児期の集中・興味・質問の経験は、幼児期の学習準備を振り返る3項目「好きなことに集中して遊んでいた」「生き物や植物に興味をもっていた」「わからないことについて、まわりに質問していた」について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出し、平均点を3区分した。全て回答した人のみを分析
出典／Benesse 次世代育成研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」（2012）

図2　上越教育大附属幼稚園が育もうとしている力



上越教育大附属幼稚園では、「リテラシー＝実社会で活きてはたらく力」と捉え、7つの力をその土台として育もうとしている。　＊上越教育大附属幼稚園の資料を基に編集部で作成

の刺激や自分の興味をコントロールして、集中して取り組む力のことですが、1年生の1学期にこそ強く求められる力だと思います。例えば、1年生の学習内容は多くの子どもにとって理解が難しいものではありませんが、授業に付いていけなくなる子どもはいます。それは、学習内容につまずいているのではなく、何色の鉛筆を使おうか考えていたり、落とした筆箱を拾っているうちに教科書のどこを見てよいのか分からなくなったりすることによる場合が多いのです。このようなことを考えても、自己調整をする力を幼少期に育むことが有効と考えます。

神村　私たちが子どもの頃は、日が暮れるまでとことん屋外で遊べる環境がありましたが、今の社会ではそれはなかなか難しくなりました。それと同じような体験を、学校がつくり出さなくてはならないと感じています。本校では、生きる力を育てるために、子どもが自ら考えて、友だちと一緒に、「ワクワクドキドキ」する体験を提供しています。自発的に活動して感動し、「毎日が楽しい！」と感じることが大切と考えるからです。

小学1年生の指導の観点①
幼児期に「前倒す」ではなく幼児期を「土台」と捉える

――保幼小接続の取り組みを深めることで、子どものどのような力が伸びるのでしょうか。

角谷　保幼小接続で大切なのは、何か新しい力を育てるのではなく、幼児期に培った力を無駄にせず、小学校教育につなげるという意識です。小学校で学ぶことを前倒しするのではなく、あくまでも幼児期を土台として考える。この時、「前倒し」と「土台」を混同しないように気を付けなければなりません。

一例ですが、1年生の4月に日記に難しい漢字を書く子どもがいますが、漢字が書けるからといって必ずしも表現が豊かとは限りません。子どもにまだ興味がないのに、保護者が幼児期に漢字を教えたのだとしたら、その時間で絵本に親しみ、手先を器用に使う遊びをする中で語いを増やす方が、小学校以降の教育で伸びる余地が大きくなると思います。

長谷川　幼児期から小学校低学年にかけては、「出来ること」よりも「やりたいこと」がたくさんある方が大切です。本園では、文字を教えるよりも、「伝えたい」気持ちを育てることを大事にしています。ある子は、卒園時に字があまり書けませんでしたが、小学校でとても上手に書けるようになりました。それは「伝えたい」という思いがあったからです。逆に、文字を詰め込みで習った子どもは、間違いを恐れてなかなか書けないことがありました。

成果ばかりを求めると、自分から動ける子どもが育ちません。特に、幼児期はひらがなや漢字を書けるようにするより、保護者や先生とたくさん話すことで語いを増やすように意識してほしいと思います。

神村　小学校でも子どもの自尊感情を高め、「自分にはこんなにすごいことが出来る」という気持ちを持たせることを大切にしています。そのような自覚があると、「総合的な学習の時間」などで自発的に学習に向かいます。1年生を「早く小学生にしよう」と考えるのではなく、不安や悩みを解消しながら、自分の良さに気付かせて徐々に育てていく教育を心掛けたいと思います。

小学1年生の指導の観点②
子どもの力を信じて待つことも大切

――幼児期からの体験を小学校で最大限伸ばす指導の工夫についてご教示ください。

神村　特に1年生では、先生自身が伸び伸びと楽しむことも大切ではないでしょうか。先生の雰囲気は子どもにも伝わるからです。

更に、教科書を淡々と教えるのではなく、子どもの興味を引き出す要素をいかにちりばめるかも大事です。高学年の例ですが、ある先生は、「○○年に××合戦があった」という歴史的事実だけではなく、どのように攻め込んだのか、どれくらいの食糧を持っていっ

たのかなどを考えさせ、実際に保存食の煎り米を用意し、子どもに食べさせていました。教えたいことを具体的にイメージできるようにすると、子どもは自分の生活体験と比べるなどして、自覚して学べます。

長谷川　今の例は具体的で、子どもが面白がって学べそうですね。待つのはなかなか大変なことですが、先生が子どもの力を信じて待つことも大切だと思います。そうすることで、子どもは考え、答えようとするからです。

神村　おっしゃる通りだと思います。子どもの主体性を大切にすべき生活科も、結局、教える教科になってしまってはいないか、再度、確認する必要があります。

角谷　気を付けなくてはならないのが、子どもはきちんと座って授業を受けて成績が良くても、必ずしも学ぶ意欲があるとは限らないということです。その要因の1つに、学習意欲や学習への意味付けが育まれていないことが考えられます。学ぶ意欲をどのように高めるのか、改めて考える必要があるでしょう。

幼小互いへの期待

「おおらか」に一人ひとりの良さをもっと認める

――幼稚園が小学校教育に、小学校が幼児教育にそれぞれ期待することは何でしょうか。

長谷川　私は元々小学校教師ですが、小学校はもう少しおおらかでよいかもしれないと思っています。子どもが萎縮しないようにあまりルールに縛られず、一人ひとりの良いところをもっと認めるのです。また、保護者に読み聞かせをしてもらうなどの工夫をして、日常的に本を読むことも必要だと感じています。それによって、語いが増え、心を豊かにして、考える力が伸びていくからです。

神村　園では思い切り遊んでもらい、「やる気」を高めてもらうことを期待しています。小学校では集団がより大きくなり、活動もダイナミックになって、大きな達成感を味わえる一方で、皆が少しずつ我慢するような自己調整力が必要です。そのような力も、幼児期に遊びを通して身に付くのではないでしょうか。小学校としては、元気に入学してもらえることが一番大切です。

角谷　私は、園・小学校の双方に期待することとして、園児と小学生の交流以上に、先生同士の交流を挙げたいと思います。毎日の授業や保育がある中では難しいと思いますが、互いの授業や保育を見合い、話し合うなど、少しずつでも進むことを期待しています。

　また、小学校の先生には、園が子どもを送り出す側として強いプレッシャーを感じていることを理解していただきたいと思います。最近の傾向として、年長時の指導が厳しく、1年生の指導の方が緩やかという逆転現象があります。年長さんになるにつれ、園の先生が「最年長なんだから」「来年は小学生なんだから」と、子どもにより厳しく、いろいろな要求をしてしまい、小学生になってからの伸び伸びした様子に驚くというのです。一般に、幼児教育や保育にかかわる先生の方が保幼小接続に熱心なようですが、保幼小の先生方が互いに教育活動を見合うことで、そのような逆転現象も解消されていくのではないでしょうか。

長谷川　管理職は、担任を支援すると共に、

環境を整え、保護者にしっかり伝えることも大切だと思います。そして、何より重要なのが、保幼小で教育観、子ども観を一致させることです。接続先の先生方と、どのような気持ちで取り組むのかを根本的に話し合い、共有することが求められます。

保護者への期待

昼間は担任が「保護者」家庭と協力して育ちを楽しむ

――入学に当たっては、保護者からの心配もあります（図3）。どのようなことを保護者に伝えるとよいでしょうか。

神村　私は、1年生の担任をしていた時、「昼間は保護者の役割をする」という気持ちでいました。そして、保護者には、共に子どもの育ちを楽しもうと呼び掛けていました。

保護者には、子どもがちょっとした失敗をしても、きつく叱らないように伝えていました。失敗して一番傷付いているのは、本人です。家に帰っても叱られてしまったら、立ち直れなくなるかもしれません。むしろ、「大人だって失敗はある」「自分もそういう失敗をした」と、共感する気持ちを子どもに伝えてほしいと言っていました。

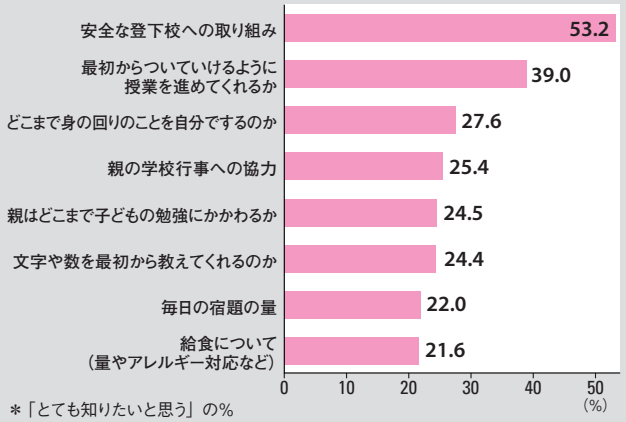
長谷川　いつも「大丈夫」と、大きく構える保護者であってもらいたいですね。子どもが心配していないことを、保護者が先回りをして不安に感じても良いことはありません。勉強についていけるか心配だからといって無理に教えては逆効果になることもあります。私は、文字を書けるかどうかよりも、「人の物を隠す・盗む」といった行動を改めるなど、子どもの本質的な問題に目を向けるように、具体的に保護者に伝えています（図4）。

神村　最近、気を付けないといけないのは、保護者がメールなどで連絡し合い、うわさが独り歩きしてしまいやすいことです。そうしたことが起きた場合、担任に相談し、また保護者として慎重に対応してほしいことをしっかり伝えておく必要があります。

角谷　小学校の学習への不安から、幼児期の保護者は、小学校での学習内容を前倒しで学ばせることも少なくありません。そうした保護者に対して、幼児期に育む必要のある力を、小学校側から伝えることも必要でしょう。また、保護者の小学校入学時の不安は、第一子の時が第二子以降に比べて断然大きいものです。これは「知らない、見えない」ことに不安を抱くからです。1年生の4・5月に授業を公開するなど、子どもの日常を保護者にも見えるようにすることで安心感が増します。家庭と連携し、1年生となる子どもが新しい環境に安心して自信を持って踏み出せるようにしたいものです。

――本日はありがとうございました。

図3　保護者が小学校について知りたいこと（年長児）



＊「とても知りたいと思う」の%
出典／Benesse次世代育成研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」（2012）

図4　長谷川先生が提案する保護者への呼び掛け

- ◎ 小さな頑張りを褒める。ちょっとしたことでも感激する（「うわ～、いいね」「すごい！」）
- ◎ 「ありがとう」と、今の数倍多く子どもに伝える。駄目なことは駄目と本気で叱る
- ◎ 十分に出来ないことは、がみがみ叱らず、丁寧に教える（食事をこぼすなど）
- ◎ 大人も基本的生活習慣を守り、親子で本に親しむ
- ◎ 他人の子どもを褒める・叱ることが出来るようにして、地域全体で子どもを育てる

＊取材を基に編集部で作成